

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第804号 平成26年9月6日

「ぼっち」が怖い(1)

「ぼっち」即ち「一人ぼっち」という事ですが、誰でも「一人ぼっち」は寂しいものです。でも、今の若者達は、「一人ぼっち」を寂しいというより怖いと感じているようです。真っ暗闇に「一人ぼっち」は怖いというのは理解できますが、昼日中、「一人ぼっち」が怖いというのは、どうしてなのでしょう？

この数年、若者達の間で静かに広がっている現象に、「便所飯」があります。

これは、文字通り「トイレの中で弁当を食べる」という行為を指しています。

「あの狭さが落ち着く」というので、トイレで新聞や本を読むという人がいない訳ではありません。つまり、トイレで本を読む人は、一人でいる空間と時間を楽しんでいるのだと思います。

ただ、食事をする場所としては、トイレは最も相応しくないはずですが、何を好き好んでトイレで食事をしようとするのでしょうか。私にはちょっと理解不能ですが、しかし、若者の中に現実にある現象だとすれば、我関せずという訳にはいきません。

国際医療大学大学院の和田秀樹教授（臨床心理学）によると、「便所飯」という言葉が「ジャパンナレッジ」や「Yahoo! 辞書」の新語探検欄に登場したのは2008年11月だそうですから（同氏著「なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか」から）、それ程古い事ではありません。

和田教授は、若者がトイレで「ひとりランチ」をするのは「ひとりになりたい」からではなく、むしろ、一人でランチを食べている姿を見られるのが何よりも嫌なのだ、と述べています。

つまり、「一人でランチを食べる」というのは「一緒に食事をする相手がない」という事であり、一人でランチしている姿を誰かに見られるという事によって、あいつは「友達がないやつだ」と見られてしまう事が恐ろしいという事のようにです。

実際、ある大学の学生食堂では長テーブルに一人分の衝立を付けて、「ひとりランチ」が目立たないようにしているという話を聞いた事がありますが、そこまでして守られている学生が社会に出たらどうなるのだろうと、余計な事かも知れませんが心配になります。

それにしても、そこまで他者の目を気にするというのはいささか病的ではないか

と思いますが、一体何故、若者達はこれ程までに他者の目を気にする、あるいは気にしなければならなくなったのでしょうか。

和田教授は、その著「なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか」の中で、「便所飯」問題について、学校教育において「あらゆる競争を否定し、子ども達に均質化を求めるようになった」事が「便所飯」問題の遠因であると述べると共に、今の学校が教える「みんな仲良く」主義は、常に「競争を否定する価値観」とワンセットとなっており、そこを重視しない事には、問題点が浮かび上がってこないと指摘しています。

(塾頭：吉田 洋一)